「確かな学力の育成と個に応じた教育の推進」

柱1　「個を活かす協働的な学び」の実現

「個を活かす協働的な学び」とは、子どもたちが課題解決に取り組む中で、個々の考えやよい点を尊重しながら交流し、自らの知識や技能を組み合わせたり、新たな価値を創造したりしながら解決を図る学びのことです。

「個を活かす協働的な学び」を実現させるためのポイント

課題設定　子どもにとって学びがいのある課題を設定していますか

知的好奇心を喚起し、主体的に考える姿勢を育みましょう。

- 一人では解決できそうにない課題
- 適度な困難さが設定された課題
- みんなで学ぶ価値を感じられる課題
- 教科の面白さや奥深さを感じさせる課題
- 知識や技能を活用しながら挑戦する課題
- 子どもの「当たり前」が揺さぶられる課題
- 実社会や実生活に関連した課題
- 単元単位で設定する大きな課題
- 子どものつぶやきから生まれた課題　など

全員参加　どの子どもも参加しやすい学び合いになっていますか

子どもの自由な発想や多様な考えを受け入れ、生かしましょう。

教室内の「画一性」「同調性」 → 個々の発想や考えのある「多様性」

意見を言いそびれてしまったり、発言をためらったりしている子どもにも「語る」チャンスを！

- 自分の考えをまとめる時間の確保
- 一人一人のよい点を見つける姿勢
- アイディアを発言しやすい雰囲気づくり
- 他者から学ぼうとする共感的な人間関係の育成
- 異なる考え方を生かした学び方の共有　など

柱2　「個に応じたきめ細かな指導」の充実

「個に応じた指導」とは、子どもの学習内容の習熟の度合いだけでなく、一人一人の発達段階や特性、問題意識、学ぶ目的等に応じた指導のことであり、「個別最適な学び」を指導者の視点で整理したものです。

「個に応じたきめ細かな指導」を充実させるためのポイント

見取り　子ども一人一人の学習の状況を見取っていますか

授業中やその前後に子どもの実態を把握しましょう。

授業では、こういう意図で伝えたつもりだったれけど、子どもたちの受け取り方は一人一人ずいぶん違うのね。

今日の授業はどのくらいの割合の子どもが理解できたのかしら。

- 授業中の子どもの反応や表情の観察
- ノートや作品、机間指導によるつまずきの把握
- 振り返り等での自己評価に関する記述の活用
- これまでの授業記録や客観的な調査記録の活用
- 類似問題による診断的評価の活用　など

手立て　内容が身に付くような手立てを用意していますか

目の前の子どもの理解の状況に合わせて、対応を考えましょう。

- 個別の対話による理解促進
- ヒントカードや具体例、見本の準備
- 子どもの実態に応じた指導方法や教材の設定
- ICT 機器の活用や個別指導による確実な習得
- 新出事項と既習事項の効果的な比較
- できるまで寄り添う教員の粘り強いかかわり
- フィードバックや励まし、称賛　など

“Is this the picture of your family?”の答えを、“Yes, this is.” としたんだね。どうしてこう思ったのかな。

同じ人を繰り返し指すときに she や he を使ったように、物の場合は it を使うよ。

授業づくりの三訓

1　しかけて待って

基本が定着してから活用させるだけでなく、活用から入る授業展開も考えられます。その際、どのようなしかけが必要ですか。しかけた後、子どもの反応を見ながら待つ姿勢を大切にしましょう。

知識や技能を活用しながら、課題に挑戦したり、学んだことをまとめ直したりする過程で、基本に立ち返ることも考えられます。

2　語らせつないで

子どもが語り始めるために、どのような発問で子どもの考えを引き出しますか。子どもの言葉を拾い、次の語りに向けて、教員がつなぎましょう。

教員が、相手意識をもって分かりやすく説明したり、他の意見を引用したり、言葉を適切に用いたりして、子どものモデルを示すことも大切です。

3　認め励ます

目に見える、見えないにかかわらず、子どもが努力したことを捉えて、どのような言葉を返しますか。授業を通して子どもの自己有用感を高め、次の学習への意欲付けにつなげましょう。

肯定して安心感や自信をもたせたり、フィードバックを通して次への意欲をもたせたりと、どのタイミングで、どのような言葉をかけるかが大切です。

さぬきの教員　授業づくりの三訓

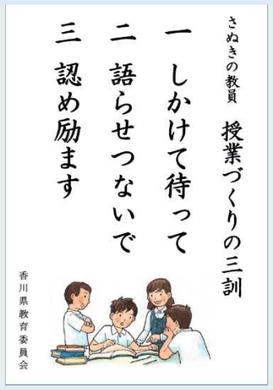
令和２年度に設置した「小・中学校における新しい指導体制の在り方検討委員会」において、これまでの香川の教育 10 年を振り返るとともに、今後 10 年を見据えた教育の在り方について話し合いました。そこで見えてきたのは、丁寧で緻密な指導を行ってきた教員の姿や、一方で、授業において受け身になりがちな子どもの姿でした。

そこで、県教育委員会では検討委員会のまとめ及び「子どもが主語となる学び」を重視する中央教育審議会答申を踏まえ、今後、香川県の先生方に必要と考えられる点を３つ示し、「さぬきの教員　授業づくりの三訓」として掲げました。

１『しかけて待って』

「しかけ」とは、教員の意図的な働きかけのことを言います。問いに対するヒントが掲載された教室掲示、子どもたちが話し合いたくなる課題設定、活動に参加しやすくなるツールの活用、多様性のある会話が生まれる学習形態、平等に全員が参加できるようなルール設定など、ねらいに応じた多様な「しかけ」があります。

大切にしたいのは、**教員の説明は最小限にし、子どもが試行錯誤する時間を最大限確保する**ということです。子どもたちの中で生まれた疑問や考えが言葉となって表れるまで、教員には「待ち」の姿勢が求められます。教員が待つことで、子どもの自ら学ぼうとする態度を育みます。



２『語らせつないで』

子どもの言葉で「語らせ」その言葉を教員が「つなぐ」ことで、学びが子どもたちのものになります。一人の発言が集団としての学びを深めたり、集団の中で多様な意見を聞くことで個の考えがさらに深まったりします。**教員は子どもたちの反応を予想し、大小様々な声を拾うため、感度のよいアンテナを張り巡らせることが大切**です。

そして、子どもたちに、ひらめいたり気が付いたりした様子が見られた時には、それについて語る時間も確保しましょう。例えば、「あっ、そういうことか。」「なるほど。」との声が聞こえた時に、教員が「今、考えていることをみんなにも分かるように伝えられますか。」という声をかけ、発言をつなぎます。子どもの発言は、時に教員や周りの子どもたちが思いもしなかった深みへと導いてくれます。

このようにタイミングよく、子どもの思考を方向付ける助言を行うのは教室のファシリテーターである教員の仕事です。子どもの思考に寄り添い、**肯定的な言葉で称賛したり、子どものつぶやきを全体に広げたり、時には、思考を「ゆさぶる」ことで知的好奇心を刺激したりしながら、子どもたちの頭の中にあることを引き出し、語らせ、つなぎましょう。**

３『認め励ます』

授業を通して、一人一人の子どもを「認め励ます」ことは、前向きに課題解決に取り組もうとする姿勢だけでなく、次の授業に対する意欲付けにもつながります。

ここで意識したいのが、**「認め励ます」というのは、ただ単に「ほめる」ことではない**ということです。「ほめる」という行為は、一般的に大人の基準で一定の水準に達したときの評価として行うことが多いですが、**子どもは、自分たちなりの基準において、「認められたい」と感じているということも考えられます。**

認められる経験は、安心感や自信をもったり、多様な考えを出し合うよさを感じたりする姿にもつながります。中には、みんなの前で励まされることを苦手とする子どももいることから、グループ学習での学びの過程を取り上げて、集団を「認め励ます」ことも効果的です。

これからの

「さぬきの教員」に求められる

授業づくりの三訓

と２つの柱

「確かな学力の育成と個に応じた教育の推進」に向けて

香川県教育委員会事務局義務教育課

令和３年１２月